

令和 6 年 11 月 1 日

エンジニアリング協会 関係者の皆様へ

一般財団法人 エンジニアリング協会
専務理事

前野 陽一

今年は、10 月下旬に入っても暖かい日が続きましたが、大分涼しい日も増えてきました。皆様お元気でお過ごしでしょうか。

ところで、季節が涼しくなるとインバウンドの外国人観光客も増えてきます。国土交通省観光庁によれば、2024 年度上半期のペースが続けば、2024 年度トータルの外国人観光客数は、3500 万人に到達するとのことです（2023 年度は、約 2500 万人、コロナ前の最高値は 2019 年度の 3200 万人弱）。

当協会は麻布台ヒルズの目の前で、かつ、東京タワーにも歩いて数分という場所に位置しているため、歩道を歩いている人は外国人の方が多いのではないかと感じられるほどです。しかも、話している言葉は英語以外も多く、人種も白人、黒人、アジア系と様々で、バギーに乗った小さな子供も数多くいます。円安の効果もあるのですが、治安が良く子供連れでも心配がない、といったことが影響しているのではないのでしょうか。

今月は、地下開発利用研究センター主催の国内見学会に参加し、青森県の奥入瀬溪流に立ち寄りましたが、未だ紅葉の季節ではないにもかかわらず、多くの日本人及び外国人の観光客がいました。道路幅が狭く、大型車両がすれ違えない場所も数多くある中で、貸し自転車（電動）を使ったり、歩いたりしてくる人も多く、交通事故が起きなければいいが、と心配してしまう状況でした。地下開発利用研究センターの田中所長は、かつて六ヶ所村の工事現場に勤務していた頃、よく奥入瀬溪流を訪れたそうですが、当時はこのような混雑はなかったそうです。京都市などの有名観光地のみならず、日本全国が「Overtourism」の影響を受けているような気がします。

以下、10 月の主な活動についてご報告申し上げます。

[主要な活動内容]

1 講演会の開催

10月は、ビジネス講演会を5件行いました。

11月も、ビジネス講演会を5件行う予定です。(11月19日(火)の講演のみ当協会内の会議室で実施し、その他は、Zoom Web 配信で行います。)

皆様のご参加をお待ちいたしております。

2 地下開発利用研究センター主催の国内見学会に参加

10月7日(月)及び8日(火)に実施した地下開発利用研究センター主催の国内見学会に参加しました。

今回は、青森県六ヶ所村にある日本原燃株式会社様の濃縮・埋設事業所の視察がメインで、併せて、国内有数の露天掘り式石灰鉱山である八戸鉱山(八戸キャニオン)の見学も行いました。

皆様ご案内のとおり、放射性廃棄物は高レベル放射性廃棄物と低レベル放射性廃棄物に区分され、更に低レベル放射性廃棄物は、放射能レベルにより、処分方法が異なります。今回は、埋設事業所内の操業中の浅地中(ピット)処分施設と、中深度処分のための試験空洞(実際の中深度処分施設の建設地点は未定)を中心に見学いたしました。

見学者は、事務局を含め30名弱でしたが、東京大学大学院新領域創成科学研究科の徳永朋祥教授が主催される勉強会と合同の見学会となりました。

私自身は、今まで3回六ヶ所村を訪れましたが、そのたびに大きく変化していることに驚かされました(最初に訪れたのは、今から40年くらい前で、その頃は商業施設もほとんどなかったと記憶しています。)。また、日本原燃株式会社様の広報担当の若い女性が、放射性廃棄物についてかなり詳しく勉強し、一般市民にもわかりやすい説明をされていることに感銘を受けました。(徳永朋祥教授も同様のことをおっしゃっていました。)

宿泊は、上北郡野辺地町にある温泉ホテルで、一部屋に3人宿泊という修学旅行気分を感じさせるものでした。(地下開発利用研究センター主催の国内見学会の伝統です。)

若手とベテランが同一の部屋に泊まるようにしており、また、参加者の専門分野も違うことから、大変良い交流の機会になっていると思います。

3 会員企業トップインタビューの実施

10月10日（木）に、コスモエンジニアリング株式会社の代表取締役社長の松林和宏様に、インタビューを行いました。

コスモというと石油のイメージが強かったのですが、今はGXに力を注がれており、また、エンジニアリングとメンテナンスの両方を行われているところに特徴があります。また、松林社長は、実業団のバレーボールチーム出身の社長というユニークな経歴をお持ちです。

まとめ次第、当協会のウェブサイトにはアップしますので、ご期待ください。

4 エンジニアリングシンポジウム 2024 の開催

10月25日（金）に、エンジニアリングシンポジウムを、日本教育会館一ツ橋ホールにて開催いたしました。

午前中は、2023年度エンジニアリング功労者表彰案件2件、午後は、有識者による講演3件を行いました。いずれの講演も興味深いものでしたが、特に日本航空株式会社 執行役員 ソリューション営業本部 副本部長 東京支社長 西原口香織様の「『安全』はあるものではなく、築くもの ～緊急時の備えと日々の訓練～」という講演では、本年1月に羽田空港に着陸した日本航空516便と離陸のため、誤って滑走路上に侵入していた海上保安庁の航空機との地上衝突事故において、旅客の皆様を一人も傷つけることなく退避させたエピソードも語られ、多くの聴衆の皆様が感銘を受けていました。

また、昨年に引き続き、会場内に「2024年度エンジニアリング功労者賞及び奨励特別賞」の展示スペースを設け、皆様にご覧いただけるようにするとともに、初の試みとして、休憩スペースに賛助会員企業（Hexagon Asset Lifecycle Intelligence division 様及び（株）PlantStream 様）のアプリケーションをご紹介しますコーナーを設けました。講演開始前及び昼休み中などに、多くの方にご覧いただけました。

昨年と同様、今年も会場における講演をオンラインで同時配信するという「ハイブリッド開催」といたしました。また、シンポジウム終了後の交流会には、公務お忙しい中、経済産業省の伊吹英明 製造産業局長をはじめ、桑田香 国際プラント・インフラシステム・水ビジネス推進室長など同室の皆様にもお越しいただき、大変な盛り上がりを見せました。

なお、参加者は、お陰様で 482 名（会場参加者：332 名、オンライン参加者：150 名）となりました。

5 その他

米国大統領選挙について書かせていただきます。実は、地下開発利用研究センター主催の国内見学会や、シンポジウムの交流会の折に、「10 月のレターでは、前野専務理事は、かなり熱く米国大統領選挙を語っているねえ」というお言葉を複数の方から頂き、「結構読者が多いなあ」と感じ、やや調子に乗って今月も思うところを、かなり大胆に書いてみようと思います。

先月は、トランプ前大統領の方がやや有利なのではないか、と書きましたが、現在（10 月末に書いています）は、かなりトランプ前大統領が勝つ可能性が高い（いわゆる「ほぼトラ」）のではないかと、と思っています。

まず、日本のマスメディアにも出ていますが、大統領選挙の結果を左右すると言われる 7 つのスイングステート（激戦州）（南西部：ネバダ州及びアリゾナ州、南東部：ジョージア州及びノースカロライナ州、中西部（いわゆるラストベルト）：ウィスコンシン州、ミシガン州及びペンシルベニア州）は、最近の世論調査の結果を見る限り、全て「ややトランプ前大統領有利」となっています。しかも、「トランプ有利」の傾向は、10 月に入ってから加速しています。米国の有名な（？）賭けサイト（Polymarket）でも、「トランプ大統領勝利」に賭ける人の割合が 60%を超え、70%に近づこうとしています。激戦州だけでなく、米国民全体をとらえた世論調査でも、トランプ前大統領の支持率が、ハリス副大統領の支持率をわずかに上回っています。

最近の両候補の集会の状況を見ても、差は明らかになってきています。トランプ前大統領は、10 月 27 日に、ニューヨーク市のニューヨーク・マディソン・スクエア・ガーデンで集会を行い、2 万人以上の支持者を集めました。他方、ハリス副大統領も、10 月 26 日に、テキサス州ヒューストンに有名歌手のビヨンセさんと呼んで集会を開くなど頑張っておられますが、集会途中でヤジが飛んでいました（どうも、ハマスやヒズボラを攻撃しているイスラエルを支援する米国現政権に対する抗議のようです。私の見た動画では、パレスチナの国旗を持って「No More War」と叫んでいました）。

今回の大統領選挙は、トランプ前大統領の勝利というより、ハリス副大統領の敗北ではないかと思っています。以下、その理由を簡単に紹介します。

① ハリス副大統領のディベートに関する経験不足が目立ってきたこと。

ハリス副大統領は、そもそも民主党内の大統領予備選挙にほとんど参加していません。2020 年の大統領予備選挙に出馬しましたが、直ぐに撤退しました。副大統領候補になって、ペンス副大統領（共和党）と 1 回ディベートを行いました。そのほかには、ほとんど公開のディベートや記者会見を行っていないはずです。

今回の大統領選挙も、バイデン大統領の認知症疑惑（？）から、急遽出馬が決まったため、民主党内での予備選挙に出馬することはありませんでした。したがって、民主党の大統領候補として、今まで 1 度も記者会見を開いたことはありませんし、マスメディアのインタビューも、民主党寄りと思われる TV 局（CNN、CBS など）にしかでませんでした。これらのインタビューでは、ハリス副大統領への質問は回答しやすいものが多く（Softball question というそうです）、やや変な回答をしても、突っ込まれることはありませんでした。

ところが、10 月に入って、ハリス陣営が「やや戦況不利」と思ったためか、様々なインタビューに出てくるようになりました。10 月 16 日には、共和党寄りとみなされている Fox News のインタビューを受けることになりました。インタビュアーのブレット・ベアー氏は、私の見るところ「ガチガチの共和党支持者」という感じではなく、「真摯なジャーナリスト」という印象を受けました。インタビューの中で、ハリス副大統領はかなり回答しづらい質問を受けました。問題は、そのほとんど全てにまともな回答をせず、はぐらかそうとしたり、トランプ大統領が悪い、と言いつけたりしたことです。

問： バイデンハリス政権の約 3 年半の間に、何人の不法移民が米国に入学したか？

答： 国境問題は、大変深刻な問題だ。我々は政権発足以来真剣に対応してきた。（数字は最後まで答えず）

問： 米国民の 70%以上は、現在状況が悪化していると感じている。あなたは、状況を変えるというが、3 年半副大統領として何をしてきたのか。どのように変えるというのか。

答： 我々の前に、トランプ前大統領もホワイトハウスにいた。（だから何？？：これは、私のモノローグです）

問： あなたは、いつバイデン大統領のメンタルに問題があると感じていたのか。

答： バイデン大統領は、しっかりとした判断をしていた。

（それならどうして今大統領選挙に出ていないのか：同じく私のモノローグ）

そのほか、米国にとっての最大の脅威国は中国やロシアではなくイランであると答えるなど、国際感覚もどうか、という感じがします。

左派系のメディアは、「ハリス副大統領はよくやった」と言っていますが、これを契機にハリス副大統領の支持率は急速に下がっており、一般米国民の評価はかなり手厳しいようです。

② 伝統的な民主党支持層が、ハリス副大統領支持を放棄していること。

全米トラック運転手組合（通称チームスターズ）が従来の民主党支持から自主投票を決めたことは、先月紹介しましたが、10月3日に全米消防士組合も自主投票を決めました。そのほか、州レベルでは労働組合の民主党離れが見られるようです。

更に、黒人やヒスパニックの男性が民主党離れを起こしつつあります。もちろん過半数は、民主党支持なのですが、従来と比べて共和党を支持する男性が多いようです。理由は、不法移民問題、治安問題に加え、経済問題（インフレーションなど）があるようです。オバマ元大統領は、「ハリス副大統領を支持しない黒人男性は、性差別主義者（Sexist）だ」と公の場で述べていますが、これは黒人男性を誹謗しているようにも取れ、逆効果のようです（その後、ファーストレディであったミッシェルオバマ氏も同様のことを集会で発言し、「上から目線だ」という評価を受けているようです）。また、ハリス副大統領は、おそらく黒人男性の票を集めるため、「黒人男性に限って、小口融資の対象とする、大麻を合法化する」といった政策を発表しましたが、かえって黒人男性を含めた多くの男性から反発を受けています。

従来民主党支持であったアラブ系米国人も、ハリス副大統領離れを起こしています。イスラエルとアラブ系組織（ハマス、ヒズボラなど）の紛争の長期化の中で、イスラエルに武器を提供し続けているバイデンハリス政権への反発が強くなり、従来民主党支持であったアラブ系米国人がハリス副大統領よりトランプ前大統領又は緑の党の候補に投票する、

といった動きが見られます。トランプ前大統領がイスラエル寄りであることは、アラブ系米国人も分かっていますが、その他の政策（経済政策）などを考えれば、ハリス副大統領よりトランプ前大統領の方がいい、ということだそうです。アラブ系米国人の数百万人程度と少ないですが、激戦州であるラストベルト、ことにウィスコンシン州やミシガン州に多く居住しているため、これらの州の選挙結果を左右する可能性もあります。

更に、ハリス副大統領はカトリック、更にはキリスト教徒の支持も失うかもしれません。10月20日に、ニューヨークで行われた「アル・スミス・ディナー」にハリス副大統領は欠席しました。このイベントは、ニューヨークにいる枢機卿（当然カトリックです）が主催する慈善ディナーであり、毎回、民主党と共和党の大統領候補が出席して、互いを **roasting**（皮肉やほのめかしを行うことによって、相手をこき下ろすこと）するのが伝統でした。これに欠席したのは、1984年の民主党モントーパール候補以来で、彼はレーガン大統領（共和党）相手に50州中49州で敗北するという歴史的な敗北をしました。それ以来、この慈善ディナーに欠席する候補はいなかったのですが、ハリス副大統領は、この伝統を40年ぶりに破りました。当然、トランプ前大統領からは、皮肉を言われ放題となりましたし、ハリス副大統領が送ったビデオメッセージ（簡単なコント仕立てとなっていました）については、司会者のコメディアンから、「子供のピアノの演奏会のビデオを見せられているようだ」と酷評を受けました。当然、カトリック信者（米国民の20%以上と言われています）からは良く思われていないでしょう。

更に、その後ウィスコンシン州において、ハリス副大統領が選挙集会を行った際、ハリス副大統領の「妊娠中絶は女性の意思のみで決定されるべき」とのスピーチに対し、二人の大学生が「**Christ is king!**」といった叫び声をあげ、会場を追い出されるという騒動がありました。これ自身大した話でもないように思うのですが、ハリス副大統領がキリスト教徒特にカトリック信者（妊娠中絶反対の人が多いのことです）に敵対的なのではないか、と思われているようです。まあ、大学生のヤジなど、聞き流しておけばよかったと思うのですが……。

マスメディアにも変化が見られます。過去数十年間、民主党の大統領

候補を公式に支援してきた Washington Post と Los Angeles Times の 2 紙が、10 月末になって、両大統領候補のいずれも応援しない、と表明しました。この決定は、両紙のオーナー（Washington Post のオーナーは、Amazon を起業した世界的資産家のジェフ・ベゾス (Jeff Bezos) 氏です）が主導で行った模様で、両紙の論説主幹は抗議して辞任しました。CNN など民主党寄りと見られている TV 局も、ハリス副大統領に対するやや厳しいインタビューをし始めています。現在も完全に「ハリス押し」の TV 局は、MSNBC（放送ネットワーク NBC とマイクロソフトが共同で設立したニュース専門局）くらいでしょうか。

更に、民主党内部からもハリス副大統領離れが見られます。激戦州であるペンシルベニア州の上院議員候補（民主党）は、一部の政策について、トランプ前大統領を支持する、との PR 広告を TV に流し始めました。

③ 民主党側が政策をあまり語らず、「トランプが悪い」しか言わないこと。

ハリス副大統領のインタビューを見ていると、最後のメッセージは、「トランプ前大統領は民主主義の敵だ」であり、どうも前向きな提案が少なくなような気がします。

10 月末になって、ハリス副大統領をはじめ民主党の幹部が、「トランプ前大統領はヒトラーを尊敬しているファシストだ」と言い出しました。2016 年に大統領選挙をトランプ前大統領と戦ったクトリントン元国務長官は、10 月 27 日のトランプ前大統領のニューヨーク・マディソン・スクエア・ガーデンでの集会を「1939 年に同じ場所で行われたナチスの集会の再現である」と主張しました。ニューヨーク・マディソン・スクエア・ガーデンでは、ケネディ元大統領やレーガン元大統領も集会を行っており、トランプ前大統領の集会のみを「ファシストの集会」とするのは、さすがに多くの米国民からは受け入れられないでしょう。（ちなみに、MSNBC は、80 年以上前のファシストの集会の動画を映しながら、トランプ前大統領の集会を批判していました。）

確かに、トランプ前大統領は、「ハイチから来た移民が、住民のペットの犬や猫を食べている」と発言するなど、問題発言の多い方だとは思いますが、それだけで「大統領失格」ともしがたいでしょう。

「トランプは悪人」「黒人であれば、ハリス副大統領を支持すべき」

「黒人女性に投票しないのは、人種差別主義者であり性差別主義者」といった民主党側の主張は、今のところ多くの米国民の賛同を得られていないような気がします。

大分長々と書いてしまいました。選挙ですから、下駄をはくまで何が起こるかわかりませんが、現状は「ほぼトラ」であることを頭において、今後のビジネスを考えるべきだと思い、私の意見を書きました。

ところで、以下、トランプ政権になった場合、どのようなことが起きそうか、私の意見を申し上げたいと思います。

まず、前提として、大統領選挙と同時に行われる上院議員選挙も、共和党が有利に進めている（100 議席中 51～52 議席を確保の模様）ことから、トランプ大統領が主要な閣僚級人事を決めた際には、あまり問題がなく上院で承認される可能性が高いと思います。

下院議員選挙については、かなり共和党と民主党が競り合っており、この段階でも帰趨は見えませんが、米国議会は日本ほど議員の投票に関し党議拘束が強くないので、トランプ前大統領の政策に関する予算も、それなりにつくのではないかと、思います。

更に、トランプ前大統領は既に 4 年間大統領職を務めているため、これ以上の再選はなく、自分の思うような政策をとろうとするでしょう。

その上で、私は以下のことが起こるのでは、と思っています。

① 米国は、地球温暖化対策を見直す。

トランプ前大統領は、「パリ協定からの離脱」を行うことはほぼ間違いないでしょう。国内のシェールオイル、シェールガスの採掘を加速し、高騰するエネルギー価格を引き下げようとすると思います。

地球全体の二酸化炭素の排出量の約 1/4 を排出する米国が、地球温暖化対策を見直すことは、他国にも影響を与えざるを得ないでしょう。

これに対し、カリフォルニア州など民主党が強い州では、独自の地球温暖化対策を講じるかもしれません。

② 米国は、ウクライナや中東における戦争を終結する方向に動く

トランプ前大統領は、選挙運動の中で、「私の大統領第 1 期では、戦争は全く起こらなかった」ということを強調しています。

どのような政策をとるか分かりませんが、強引な手法をとっても、ウクライナ紛争や中東における紛争を終わらそうとするかもしれません。

また、海外へ米軍を派遣することに関しては、かなり抑制的になるのではないかと考えています。

③ 米国は、景気刺激策に動く（？）

現在の多くの米国民の不満はインフレーションです。インフレーションの抑制には、緊縮的な政策がいいかもしれませんが、トランプ前大統領は、税の減免や金利の引き下げなどを主張しています。

こうした政策は、議会が承認しなければならないので、トランプ前大統領の思惑通り進むか分かりませんが、トランプ前大統領は景気を刺激する方向に進みたいと考えているでしょう。

また、トランプ前大統領が主張するように、「違法移民（illegal immigrant）の国外追放（deportation）」を行った場合、人道上の問題のほかに、一時的な人手不足といった経済問題が生じる可能性もあると思います。

④ 米国は、「Woke」的な施策を見直す（？）

今回ハリス副大統領が不人気だった理由の一つとして、過度の「Woke」的な主張があったのではないかと思います。「Woke」とは、説明しづらいのですが、「意識高い系の主張」だと思っており、例えば、ジェンダー平等など誰も否定できないことを根拠に、「性転換した元男性が、女性としてスポーツイベントに参加することも容認する」といったもので、女性の中にも疑問を唱える人が多いようです。

こうした政策は、見直しがなされるかと思います。

このほか、トランプ大統領が高齢であることから、ヴァンス副大統領の役割が増す可能性もあります。

日本では、10月の衆議院議員選挙の結果、Hung Parliament(国会内で、どの政党（連合）も単独過半数を占めない状況)となりました。どなたが総理大臣になっても、政権基盤が強いとは言えないと思います。決して扱いやすいとは思わないトランプ新政権（なるとすればですが）に立ち向かっていくのは、大変なことだと思います。

最後に、日本のマスメディアも、もう少し米国の様々な報道を見て、ありのままの姿を日本人に伝えてほしいと思っています。

11月の講演会の実施について

令和6年11月1日
エンジニアリング協会
専務理事 前野陽一

11月は、ビジネス講演会を5件行う予定です。

11月19日（火）の講演は当協会会議室にて実施いたしますが、それ以外の講演はZoom Web配信で実施いたします。

多くの方のご参加をお待ちいたしております。

なお、正式なご案内は、別途お送りいたします。

1 Future Made in Australia～オーストラリアが創る未来～

（11月7日（木） 在日オーストラリア大使館（Australian Embassy Tokyo）
首席公使 ピーター・ロバーツ（Peter Roberts）様
公使（商務）北東アジア統括ジェネラル・マネージャー
エリザベス・コックス（Elizabeth Cox）様）

オーストラリアと日本は様々な分野において、長きに渡り緊密かつ成熟したパートナーシップを築いてきました。

昨今では、脱炭素に向けたエネルギーtransitionにおいて、二国間の関係は更に強まっています。

今回は、2024/25年度オーストラリア政府連邦予算：Future Made In Australia の主要政策(エネルギー移行関連プロジェクトや支援等)、未来のガス戦略、貿易、脱炭素化実現に向けたビジネス機会や豪州経済の最新情報につき、在日オーストラリア大使館の公使お二人より、お話しいただきます。

日本語で解説いただきますので、「英語はどうも……」といった方を含め、多くの方のご参加をお待ちしております

（注） 講師の一人であるエリザベス・コックス公使に対しては、私がインタビューをさせていただいたことがあります。

併せて、ご覧いただければ幸いです。

https://www.ena.or.jp/?fname=embassy_202301.pdf

2 インフラ・プロジェクト受注・履行・買収の実務的留意点

(11月8日(金) 東京国際法律事務所

弁護士 森 幹晴 様

弁護士 松本 はるか 様

弁護士 荒井 陽二郎 様

弁護士 竹内 悠介 様)

この講演では、企業の皆様がインフラ・プロジェクトに関わる典型的な場面（インフラ・プロジェクト受注交渉時、インフラ・プロジェクト履行時及びインフラ・プロジェクト買収時）を取り上げて、適切なリスク管理のための各場面での実務的留意点について解説いただきます。

法務部門を中心に、多くの方にお聞きいただきたい講演です。

3 第5期中期経営計画及び最近の取組について

(11月14日(木) 株式会社国際協力銀行 企画部門 経営企画部 企画課

課長 花形 峻 様)

多くの賛助会員企業の皆様が、株式会社国際協力銀行（JBIC）の出融資を活用してビジネスを行っておられると思います。

今般、JBIC様は、2024～2026年度を対象とする第5期中期経営計画が策定されました。また、昨年の国会ではJBIC法の改正により、JBICの機能強化も行われました。

今回の講演では、第5期中期経営計画を中心に、JBICの最近の特徴的な取り組みをご説明いただきます。

海外営業部門や経理部門の皆様を中心に、多くの皆様のご参加をお待ちしております。

4 多発化・激甚化する自然災害リスクに対する保険の役割

(11月15日(金) 東京海上日動火災保険株式会社

マーケット戦略部日系グローバル推進室

専門課長(海外プロジェクト) 山本 治 様)

世界各地で自然災害が多発化・激甚化しており、過去に例を見ないほど増大している自然災害リスクは、保険会社に対しても極めて大きな影響を及ぼしています。

このような環境変化において、プロジェクトに携わる関係者と保険会社がどのように連携して自然災害リスクの影響の低減に取り組んでいくか、そのような中での保険の役割も含め考察の一助となる内容をご講演いただきます。

海外営業部門やリスク管理部門の皆さまに、是非お聞きいただければと思います。

5 経済安全保障の確保に向けて

～懸念国の不正活動に巻き込まれないために～

(11月19日(火) 公安調査庁 講師未定)

技術覇権を巡る米中対立やロシアによるウクライナ侵略など、国際秩序は大国間競争の時代に回帰しており、軍事専用技術が軍事的優位性を規定していた時代から、半導体をはじめとした民生技術が軍事力を含めた国家の競争力の優劣に大きく影響する時代となっています。

このような情勢下において、通常の経済・学術活動を隠れ蓑にして、我が国が優位性を持つ機微な技術や製品、重要データ等が窃取される懸念が高まっています。

今回の講演では、懸念国による不正活動について、実際に確認された事例に基づき、具体的な手口や傾向、対策のポイント等についてご紹介いただきます。

(注) 本講演会は、当協会内の会議室で行い、Zoom Web 配信は行いません。

また、諸般の事情により、お申込みいただいても、聴講をお断りせざるを得ないことがあることをご承知おきください。

[第38回]

Kakeai 株式会社 KAKEAI

このとき、これから変わる時。

代表取締役社長 兼 CEO **本田 英貴 氏**

あなたがどこで誰と共に生きようとも、 あなたの持つ人生の可能性を絶対に毀損させない ～ 1on1 ミーティングがあなたの会社と社員を変える～

株式会社KAKEAIは、2018年4月に、本田英貴様（現代表取締役社長兼CEO）により設立され、現在、特許に基づいた「1on1支援クラウドシステム『Kakeai』」により、多くのお客様を得て、急成長を遂げている企業です。

本田様の創業の思いについては、株式会社KAKEAIのWEBサイトに「今、この瞬間にも起きている、自分と同じ失敗を社会から無くし、働く一人ひとり・チーム・企業・社会の持てる力があるのまに発揮される社会へ。」と題する文章に書かれていますが、本田様がサラリーマン時代に体験した失敗を、誰にも経験させたくない、という強い意志がベースとなっています。

今回のインタビューでは、本田様から「何故日常的な1on1ミーティングが、企業にとっても社員にとっても必要なのか」「1on1ミーティングを行う際に、『1on1ツールKakeai』がいかに有用有益か」といった点について、熱く語っていただきました。



創業のきっかけは、 自分自身の失敗体験

— 御社のWEBサイトを見て驚いたのですが、「創業の想い」として、本田様ご自身の失敗体験が詳しく載せられていました。始めに、創業のきっかけからご説明いただけますか。

本田 私は、大学卒業後、リクルートという会社に入り約13年間働きました。私には「人の生き方に関わる仕事をしたい」という思いがあり、それが実現できる会社でした。仕事にはやりがいを感じ、次第に大きな仕事も任せられるようになりました。当時、浅はかにも「この会社で偉くなって、もっと大きい仕事をしていきたい」と思い、仕事に一生懸命取り組んでいました。期待や評価もいただき、管理職として人事担当となりました。

そうした中で、上司だけでなく、同僚や部下からの評価やコメントも求める

「360度評価」を実施することとなりました。当時私は、部下とのコミュニケーションに対して自信満々でした。きっと、部下の皆からは多くの感謝の言葉が送られてくるに違いないと確信していました。ところが、結果を見て愕然としました。「あなたには誰もついていきたくないって知ってます??」という無記名のコメントが返ってきました。めまいがするほどショックを受けて、当初は「私宛のコメントではなく、他の管理職宛のものが紛れ込んだのではないか」と疑ったほどですが、当然そのようなことはなく、私は自分の大きな勘違いを悟りました。

そこから部下や同僚とのコミュニケーションの仕方が分からなくなってしまい、組織としてすべき仕事を全て自分だけで抱え込むようになり、ハードワークを続けていく中で、体調不良となってしまいました。どうしようもなくなって病院に行ったところ、「重度の鬱であり、まずは休むように」と言われました。休職し始めの頃は、「自分の人生は終わってしまった」と自分自身のことしか考えられない状態でしたが、時間が経つにつれて、徐々に自分を客観視できるようになり、「本当に自分の行っていた部下へのコミュニケーションは、部下のためなどと思いながら、結局のところ独りよがりで、たまたま私と共に働くことになった人たちの人生を傷つけていた」という後悔、情けなさ、恥ずかしさに襲われ続けました。

会社を辞めることも考えたのですが、「謝りたい」「ここで自分に向き合わなければ、本当に自分の人生は終わってしまう」と思い直し、会社に復帰することとしました。復帰して社内を見渡すと、以前の私と同じように大きな勘違いをしている上司もいれば、その人が部署に異動してくるだけで、業績も、そこで働く様子も前向きに変わるという上司がいることが分かりました。どの上司も一生懸命やってはいるのですが、経験や勘や人間力という非常に曖昧なものに依存している。これを変えなければ、私のような勘違いをした人によって、今この瞬間も不幸が生まれ続けている。これを変えたい、というのが株式会社KAKEAIの創業のきっかけです。

KAKEAIとは？

—— 本田様は、人への思いが強い真面目な方なのですね。ところで、社名である「KAKEAI」とはどのような意味なのですか。

本田 KAKEAIは、「掛け算」の意味です。共に生きる人同士が、お互いに掛け算で仕事をし合おうということです。掛け算の答えは当然大きくなりますが、一方がマイナスやゼロであればゼロ以下にもなります。人が人と関わって生きていくことは避けられませんが、時として人は人への関わり方を間違え、不が生まれます。それがない社会にしていきたいという意志を込めています。

1on1ミーティングとは何か？なぜ必要か？

—— ここで、御社が提供されている「1on1ツールKakeai」の話に移りたいと思います。始めに、1on1ミーティングとはどのようなもので、なぜ必要なのでしょう。

本田 1on1ミーティングを、業務のミーティングと対比してご説明すると分かりやすいと思います。業務のミーティングでは、業務の進め方といったことを話し合うわけですから、当然上司側が判断し、リードして部下に指示を出し

ていくこととなります。これに対し、1on1ミーティングとは、「部下が主体のミーティング」であり、例えば、「部下の今後のキャリアパス」「プライベートで部下が困っていること」「部下の健康状態」といった仕事以外のことも話合われます。働く方一人ひとりにとっては、目の前の仕事を片付けていくことほどは緊急度は高くないものの、人生にとってとても重要度が高いテーマが会話されることとなります。

近年、こうしたことを上司と部下が定期的に話し合う1on1ミーティングの機会を設ける企業が増えているのです。昭和の頃であれば「飲みにケーション」を通じて補われていたかもしれない、人と人のつながりや信頼関係ですが、今ではハラスメントやリモートワーク等もあり、意識して時間を設けなければ難しくなっています。それができないが故に、企業視点で言えば踏み込んだマネジメントもできないし、働く一人ひとりの視点で言えば、やりがいや手応えを感じにくくもなっています。これらは、当然生産性のダウンや離職にもつながります。まさに、企業と従業員の結節点の強化として1on1ミーティングの重要性が高まっていると考えています。

中長期的な視点で申し上げれば、少子高齢化が進む日本社会の中で、労働力は、今後ますます貴重な経営資源となっていくと思います。また、雇用も流動化し転職は当たり前です。こうした中で、企業が持続的に成長していくためには、働く人々が何を考えているのか、何にやりが



Kakeai 画面



1on1 実施中

いを感じるのか、何に困っているのかといったことを企業が適時的確に把握し、支援していくことが、ますます重要になっていきます。「部下が主体のミーティング」というと、「企業が社員におもねるのか」と捉える方もいらっしゃるのですが、むしろ企業としての存続や成長のために、これまでの従業員を「一律に管理」するマネジメントスタイルから「個別に支援」というかたちが変わらざるを得ない環境になったということです。

当社では、2020年に1on1ミーティングの支援ツールである「Kakeai」のサービス提供を開始しましたが、最近でも月に数百件のお引き合いをいただいています。このことは、多くの企業が、1on1ミーティングの重要性を感じる証だと思います。

——具体的にどの程度の人数の部下に対し、どの程度の頻度で1on1ミーティングは行われているのでしょうか。

本田 企業によって様々ですが、一人の管理職が5、6人の部下を対象として行い、頻度としては2～4週間に1度、1回あたり30～60分程度かけて行うというものが一般的です。

——管理職の方にとっては、結構な負担となりますね。

本田 時間はかかりますし、神経も使うことになりますが、むしろマネジメントがスムーズになり総合的には楽になったというお声が多いです。

2023年時点で、国内の全就業者の約30%が1on1ミーティングを実施しており、これは2019年時点の3倍となっています。「ある程度の社員が辞めてい

くことも仕方ない」と考える企業もあるでしょうが、社員の方々にしっかり力を発揮して働いてもらおうと考えるなら、1on1ミーティングの実施は不可欠だと思います。

世の中の標準が変わった、と思っています。

特許に基づいた 「1on1ツールKakeai」

——ところで、1on1ミーティングを行うと決めても、具体的にどのようにやったらよいか分からない企業も多いと思います。そこで役に立つのが、御社の提供する「1on1ツールKakeai」なのですね。

本田 おっしゃるとおりです。当社の提供する「1on1ツールKakeai」は、「二者間のコミュニケーションにおいて個人への関わり方を改善するためのコンピュータシステム、方法、およびプログラム」ほかの特許に基づいた当社独自の支援ツールです。これをお使いいただくことにより、1on1ミーティングの質が確実に高まります。具体的にいくつかご説明しましょう。

まず、1on1ミーティングを行う前に、部下の方が、何について話したいかを選びます。それは、今後のキャリアであったり、プライベートであったりします。加えて、上司に期待する対応についても選択します。アドバイス



がほしいのか、単に話を聞いてほしいのか、といったことです。部下の皆さんは予めこうしたことを考えることによって、頭が整理されますしミーティングを主導しやすくなります。他方、上司としても、どう対応していいかが予め分かるわけです。部下が何について話したいのか、どういう対応を期待しているのかを事前を選び、上司が事前にそれを把握することができる。極めて簡単なことと思われるかもしれませんが、これも当社の特許です。

また、1on1ミーティングが終わった後に、部下の方には完全に匿名で「ミーティングの満足度」をKakeaiに教えていただきます。この結果から、上司ごとの「得意なこと」や「苦手なこと」が分かってきます。例えば「プライベートについてアドバイスするのは



本田 英貴（ほんだ ひでたか）

筑波大学卒業後、2002年に株式会社リクルート入社。商品企画、グループ全体の新規事業開発部門の戦略スタッフなどを経て、(株)電通とのJVにおける経営企画室長。その後、(株)リクルートホールディングス人事部マネジャー。人事では「ミドルマネジメント層のメンバーマネジメント改善施策」や「Will、Can、Must・人材開発委員会・考課・配置等のデジタル化」を担当。2015年リクルート退職後、スタートアップ数社での役員を経て2018年4月に株式会社KAKEAIを創業。

得意だが、今後のキャリアについて一緒に考えたりするのは苦手」といったこともありますし、「人間関係について話を聞くのは得意だが、会社や部署の方針について上司としての意見を伝えるのは苦手」といった感じです。こうした結果はKakeaiを使う多くのユーザーのデータやAIから導かれ、上司はそれを参考にミーティングの質を改善することができます。

—— 部下の方から聞いた要望を、できるだけ実現することも重要ですね。

本田 そうですね。1on1ミーティングを行う前は、部下の方は、「上司の方が分かってくれば、問題は解決するだろう」という期待を持っておられたかもしれませんが、いざ1on1ミーティングというかたちで上司との時間を持ち、思いを伝えてみても、それを上司がきちんと受け止めたり回答していかなければ、かえって部下の不満を助長することとなります。

—— お伺いしていてふと思ったのですが、夫婦関係など上司部下の関係以外にも応用できる考え方ですね。

本田 おっしゃるとおり他のシーンへも転用できます。実際にある学校では当社の支援ツールを利用して、先生と生徒の面談を行っていらっしゃいます。

社長も会社の一員

—— 最後に、御社の社風や本田様の働く姿勢について、お伺いできますか。

本田 KAKEAIという社名の由来である「掛け合い」とも通じるものですが、私たちが掲げている行動指針は「正で掛かり合い、和を積で超えよ。」というものです。仲間や、事や、場に対して正対し、しっかりと心を使い行動で表していくことを大事にしています。当社の中で、私は他の社員と同じ

「一員」だと思っています。真剣に事業のことを考え、行動している一人に過ぎません。週末も含め仕事に取り組んでいます。

—— 本日は、お忙しい中大変ありがとうございました。



インタビュー後記

株式会社KAKEAIの本社は、地下鉄銀座線外苑前から徒歩数分の所であり、窓からの眺めが最高でした。

本田様はエネルギーかつ雄弁な方で、インタビュー記事を書く材料は十分でしたが、紙面の大きさの関係でどこを落とすかを悩みました。また、自分自身の失敗談をWEBサイトに載せておられるなど、「企業で働く人一人ひとりを幸せにしたい」という率直な思いが、伝わってきました。

私も財団法人の事務局の管理職であり、「本田様の爪の垢を煎じて飲んだ方がいいかな」と思っていました。

聞き手：当協会専務理事
前野 陽一



企業データ

社 名：株式会社KAKEAI
事業内容：1on1・ピープルマネジメント支援クラウドシステム「Kakeai」の開発・運営
設 立：2018年
所 在 地：東京都港区北青山2-13-5 青山サンクレストビル8F
従業員数：60名(2024年9月末現在)
ホームページ：<https://kakeai.co.jp/>



この人に聞く! Interview

第5回

JFEエンジニアリング株式会社 特別顧問(前代表取締役社長)

お お し た はじめ
大下 元氏

海外プラント事業に 行き着くまで

～想定外の経理業務からのスタート～

1957年山口県に生まれる。早稲田大学法学部卒業
1982年4月 日本鋼管株式会社入社
2012年4月 JFEエンジニアリング株式会社常務執行役員
2014年4月 同社専務執行役員
2015年4月 同社取締役専務執行役員
2016年4月 同社代表取締役専務執行役員
2017年3月 同社代表取締役社長
2024年4月 同社特別顧問(現任)
2017年7月～2019年6月 一般財団法人エンジニアリング協会理事長



JFE エンジニアリング株式会社は、2003年に、日本鋼管(NKK)と川崎製鉄によって培われた製鉄技術、造船技術などを継承して設立され、世界をリードする「総合エンジニアリングカンパニー」を目指して、社会基盤や産業の根幹を成す商品・サービスを提供しておられます。

大下元様は、1982年に日本鋼管株式会社に入社後、清水製作所、鶴見製作所で経理を担当され、その後本社に異動となり、国内営業(電力会社担当)を経た後、2001年からは、日本鋼管と川崎製鉄の合併関連の業務に携わられました。

JFE エンジニアリング株式会社設立後は、経営企画部、リサイクル本部、経理部などで活躍され、

2012年4月からは常務執行役員、2015年4月からは専務執行役員(海外統括本部長)の要職を経た後、

2017年3月に代表取締役社長、2024年4月に特別顧問に就任されています。

2017年7月から2019年6月までの2年間、(一財)エンジニアリング協会の理事長もお務めいただきました。

今回のインタビューでは、海外プラント事業を希望して日本鋼管に入社した後、なかなか自分の希望する部署に行けない中で、どのようにモチベーションを維持して業務に精励してこられたか、といったことを中心に、文科系の学部出身者にとってのエンジニアリング会社の魅力について、じっくり伺いました。

海外プラント事業に 魅力を感じて 日本鋼管 (NKK) に入社

— 始めに、大下様が何故JFEエンジニアリング株式会社に入社されたのか、その経緯からお話いただけますでしょうか。

大下 私が就職活動をした時代は、現在と違ってインターネットが発達していませんでしたから、送られてきた就職雑誌をチェックして、希望する企業にハガキを送って資料を取り寄せる、というところから始まりました。私は、山口県山口市の出身で、「山口県庁か山口放送に行こうかな」と考えていました。ところが、就職雑誌の日本鋼管のページをたまたま開けたところ、そこに載っていた写真が製鉄所ではなくLNG基地だったことに衝撃を受けました。それまで、海外プラント事業といったものの存在も知らず全く興味もなかったのですが、その写真を見た瞬間、「鉄鋼会社が海外でプラント事業を展開している」ということに感銘を受け、是非とも自分も海外プラント事業に携わってみたい、と思ったのです。日本鋼管以外にも、海外プラント事業を展開している企業もありましたが、縁あって、日本鋼管に入社することとなりました。

日本鋼管の面接では、面接担当の方から「専業エンジニアリング会社もあるのに、何故海外プラント事業に従事するために日本鋼管を選んだのか」と聞かれました。私は、「プラントの多くは鉄という素材でできています。したがって、鉄を作る技術を持ち、さらに製鉄所という巨大なプラントを運転するノウハウを持つ製鉄会社のエンジニアリング部門に、新鮮な魅力を感じました」と答えました。別に格好をつけるわけでもなく、本心からそう思っておりまして、現在もその判断は間違っていなかったと思っています。

— 大下様は、法学部のご出身で、様々な進路があったと思うのですが、日本鋼管にご縁があったのでしょうか。ところで、海外プラント事業に携わるとすれ

ば、英語の能力が必須だと思うのですが、その点では不安はなかったのですか。

大下 私の生まれ育った山口市は人口も少なく、受験のための予備校は一つもなく、唯一あったのが英会話塾でした。私は、その塾で、小学校6年生から高校3年生まで英会話を学んでいました。当時はレコードを聴いて英会話を学ぶ、といった時代でしたが、英会話には自信がありました。

最初の配属先は 造船部門の経理担当

— 入社されて、最初の配属先は、造船部門の清水製作所（以下、清水）の経理担当だった、とお伺いしていますが、どのようにお感じになりましたか。

大下 まさに「青天の霹靂」でした。海外プラント事業と関係のない造船部門で、勤務地は行ったこともない静岡県清水市、職種は全く知識のない経理ということで、ショックは大きかったです。

— 入社早々大変でしたね。そうした中で、どのようにモチベーションを上げたのですか。

大下 二つのことを支えに、モチベーションを上げました。第一に、私の前任者に当たる方が、3年間このポストにいて、海外プロジェクト部門に移られてインドに赴任され、さらにその前の方もサウジアラビアに赴任されていることが分かったのです。そこで、私は、「このポストは、海外に赴任する社員が、その勉強をするために就くポストに違いない」と考えました。今から考えると、かなり手前勝手な思い込みですが。

もう一つは、造船所では、製造の過程が全て目の前で見られるということです。製鉄所から送られてきた鉄板が、水切りクレーンで揚げられて鋼材置き場に置かれ、カッティングマシンでカットされた上で、船舶に組み上げられていく。他方、エンジン、ボイラーなどの機械が搬入されてきて、船舶に載せられて



清水時代（1983年） 前列右端が大下氏

いく。こうしたプロセスが、最初から最後まで間近で見られるのは、造船所以外ではありません。特に文科系の学部出身者にとって、機械や部品に関する知識など、技術的な素養を高めるには最適な場所であると思いました。

— 経理についても、ほとんど知識がなかったとのことでしたが、ご苦労されたのではないのでしょうか。

大下 経理については、一から勉強せざるを得ませんでした。学生時代に商法は勉強しましたが、バランスシート（BS）や損益計算書（PL）を見ることなどありませんでした。私の経理の能力向上に多大な貢献をいただいたのが、当時の「鬼上司」です。仕事に大変厳しい方で、「とにかく君は全然経理を勉強しようとしな。知ったかぶりのことを言っているだけだ」と言われてしまいました。声を荒げるということではなく、論理的に詰めてこられる方なのですが、当時の私にとっては大変でした。私の前任者は既に海外に赴任しているため、分からないことがあれば、その「鬼上司」に聞くしかありません。気の滅入ることもありましたが、必要に迫られて、何度もその上司とやり取りをしました。

もう一つ大変だったのは、女性社員との関わり方でした。私の方が年上でしたが、女性社員の方々のほうが長く会社に勤めておられて、仕事の中身も良くご存じです。上司から言われた資料を作ってもらうように依頼すると、「何故この忙しい時期に、そのような資料を作らなければならないのですか」と言われることが、しばしばありました。「仕事を効率的に行うためにも、資料作成の意味を教えてください」と言われ、上司と女性社員の板挟みとなることもありました。

ただ、こうした経験を積む中で、経理の知識が高まるだけでなく、論理的に人を説得するためにはどうすべきか、というノウハウも身に付いていった気がします。

——清水で、3年間経っても異動はなかったんですね。

大下 はい。3年間経理を担当して、本社の経理部門ともスムーズにやり取りができるようになり、「海外プロジェクト事業を担当する際に必要な経理の知識を身に付けた。そろそろ異動のお声がかかるのではないか」と思っていたのですが、結局清水には6年超在籍することとなりました。そうした中で、「鬼上司」から、「最近君は仕事のモチベーションが上がっていないようだ。目の前の仕事だけを考えるのではなく、今後10年間のキャリア計画を作ってみる」と言われ、「何をしたいか(will)」「何ができるか(can)」「何をすべきか(must)」を書いてみました。私の実際の経歴は計画表どおりにはなりませんでした。自分のすべきことを見直すきっかけにはなったと思います。

人とのつながりを築き、業務統合のやり方を学んだ 鶴見製作所時代

——6年間清水におられて、鶴見製作所（以下、鶴見）に異動になっても、経理を担当されたのですよね。どのようにモチベーションを維持されたのですか。

大下 確かに同じ経理担当なのですが、鶴見には清水とは違って、海外プロジェクトを担当されている人も多く来られることから、社内のネットワーク、人とのつながりが広がりました。

さらに、鶴見時代に行った仕事の中で、その後の自分の仕事に役立ったものとして、「製作所会計単位とシステムの統合」があります。当時、日本鋼管には、清水、鶴見、津製作所の3工場があり、会計システムもそれぞれバラバラでした。これを合理化するために、一つのシステムに統合しようということになり

ました。工場の規模から見ると、鶴見が一番大きいので、普通は鶴見の会計システムに合わせる、という考え方もあるかもしれませんが、それが最善の方法とは限りません。実際、清水と津のシステムとは類似しており、かつ、鶴見より優れていることが分かったため、鶴見のシステムを他の二つの工場に合わせる形で統合しました。誰でも自分が慣れ親しんでいるシステムに合わせたがるので、結局「論理的にどちらが優れているか」ということで決めるしかないのです。

——清水時代に、「鬼上司」や女性社員から鍛えられた結果、「論理的思考をベースとした説得方法」を身に付けられた、ということですね。

大下 会計システムの統合の経験が、2001年からの「日本鋼管と川崎製鉄の統合」の仕事に役立ちました。歴史も考え方も違う二つの会社の事業統合は、日本鋼管という同一会社の中での統合の仕事とは、比べものにならないほど困難な仕事でしたが、結局、統合という意味では「お互いを理解し合った上で、論理的に考えてプロセスを進める」という原則は変わりません。単に売り上げが大きいかわからないか、というだけで相手側と交渉をしても、合意は得られないのです。会社の合併という仕事は、誰も経験したことのない仕事なので、かなり自由にやらせてもらいました。楽しい思い出です。

その後、M&Aを行うときも、交渉過程で「相手の会社を買うのだから、当社のやり方に合わせるべきだ」という考えは取らず、あくまで対等の立場で、どのようなやり方がベストかという観点で話し合いを行ってきました。

経理担当から国内営業担当やリサイクル担当に

——話を少し戻して、鶴見の会計担当から、国内営業部門に移られたのですね。

大下 はい。経理部門の仕事は大分やったので、経理以外の部門に移りたい、という希望を出したところ、1993年に



バングラデシュ ジャムナ鉄道橋 PJ 現場にて (2023年)

電力営業部に異動となりました。お客様は電力会社だったのですが、「電力設備投資氷河期」に当たってしまい、約9年間在籍したのですが、あまり大きな仕事はできませんでした。その後、企画部に移り、先ほどお話しした「日本鋼管と川崎製鉄の統合業務」を行いました。

——その後、リサイクルのお仕事もなさっておられますね。

大下 2009年に、リサイクル本部企画部長を拝命し、初めてEPC（設計・調達・建設）ではなく事業運営の分野に関わりました。当時、中国にペットボトルのリサイクル工場を建てて運営する、というオーナーサイドの仕事を初めて経験しました。結果的には実現しませんでした。10年後、後輩たちが日本で廃棄ペットボトルからペット原料を作る工場を稼働させてくれたのはうれしかったです。

常務執行役員になって、初めて海外プロジェクト事業を担当

——大下様のお仕事をずっと聞かせていただいていたのですが、海外プロジェクト事業に携わられたのは、いつからですか。

大下 常務執行役員になってからです。フィリピンやベトナム、インドネシアなど、東南アジアにおける下水道事業がターゲットでした。日本の専門エンジニアリング企業は、エネルギー関連のプロジェクトに注力していたので、水関係の事業は当社にとって有望分野でした。もちろん、スペインの企業など海外には、有力なライバル企業もいましたが。まずは、海外プロジェクト事業を担当できる



ベトナムで進行中の3つのプロジェクトと現地法人の合同報告会(2022年)



東京マラソン(2013年)

人を採用することから始めました。ようやく海外プロジェクト事業に携わることができて、非常にうれしかったですね。

——ところで、様々なお仕事をなされて、ようやく入社当時の希望を叶えられたとのことですが、エンジニアリング会社に入社して良かったと思われますか。

大下 もう一度就職活動をしろと言われたら、JFEエンジニアリングを選ぶと思います。エンジニアリング会社というと、「理科系の学生向き」というイメージがあるかもしれませんが、文科系の学生にとっても、経理、法務、営業といった職種だけでなく、国内か海外かといった活動地域、EPCかオーナーサイドか、など活躍の場は数多くあります。何をしたらいいのか分からない、何に向いているのか分からない、と悩んでいる人には、

エンジニアリング会社が良いかもしれません。ことに当社は、EPC事業と運営型事業を組み合わせることにより、収益性の向上と経営の安定を図っています。学生の皆様には、当社をお勧めします。

若い世代に伝えたい言葉

——最後に今までの経験を踏まえて、学生を含む若い方々にお伝えしたいことをお願いします。

大下 まず若い方々に是非読んでほしい本があります。それは、1986年に出版されたかなり古い本なのですが、『エンジニアリング産業：構造と経営戦略』という本です。ここに書かれている「エンジニアリング産業の役割」は、当

時も今も変わっていません。GXやDXを推し進めるには、1社ではできません。複合的に産業や会社が集まる必要があり、その中で、エンジニアリング会社を中心となってマネジメントしていく必要があると思っています。

もう一つ若い方々にアドバイスするとすれば、「決断は重要だが、物事をあまりに早く決めすぎるな」ということです。周りの人の方が自分のことをよく分かっている、ということもあります。早急に決断をせずに、一旦深呼吸して深く考えることも必要な時があります。

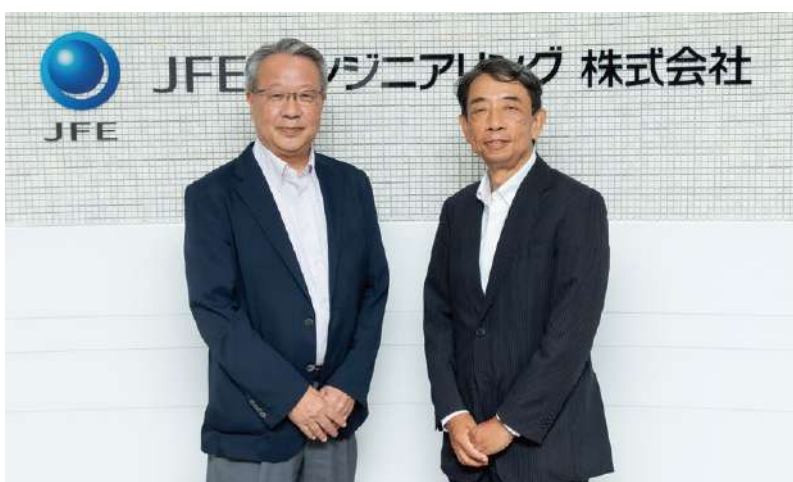
——本日はお忙しい中、大変ありがとうございました。

インタビュー後記

大下元様に対する私の印象は、「とにかく明るい人」ということです。いろいろとご苦労もあると思いますが、周りの人にそれを感じさせない「人としての温かさ」があります。

インタビューの中では、マラソンやサーフィンなど趣味の話も伺ったのですが、字数の関係で割愛せざるを得なくなりました。65歳からサーフィンを始められたとのことですが、素晴らしいことだと思います。

聞き手：当協会専務理事
前野 陽一



本資料の複製・転載・改変・再配布を禁止します。 No part of this document may be reproduced, reprinted, modified or distributed.

